

随
筆

父のこと

甘粕保子

実家は風呂屋を営んでいた。父は背は低いが筋骨逞しい人だった。上半身は裸で、真っ赤に燃える釜の中におがくずや薪を大きなシャベルに取って放り投げていた。

養女に出ている、親戚のおじさんと思っていた小さい頃の私には近寄ることも怖いような人だった。家の入口がその父の働く釜の横だったので、私は挨拶もせず、逃げるように家の中に入っていったものだった。

小学生の頃、夏休みにひとりでお泊りに行った。従妹と思っていた妹たちと次第に打ち解けて遊んでいたが、休み時間で父が家の中に入って来ると、私はなるべく父の近くに寄らないようにおとなしくしていた。

夜になって、その父が家の入口の外から子供たちを呼んだ。わーっと飛び出す妹たちの後ろからこわ

ごわ覗くと、働く父ではない笑顔で、手に沢山の花火の袋を持っておいでおいでをしているのだった。しゃがんで私を膝に乗せて、線香花火をしてくれた。

双子だった長女、次女の片方を、母の産後の大変さを思い、伯母が引き取って結局ずっと育てていたのだ。

私が訪ねていくと父は本当に嬉しそうにかまってくれたのだった。が、何も知らない私は、いつも下を向いて恥ずかしがっていた。

亡くなった父の齢も超えてしまった今になって、あの頃の父がめっちゃくちや懐かしい。

猿田彦命とぎっくり腰

市川光治

(文芸光風)

猿田彦命は天孫降臨の際、ニギノミコトを葦原中国に案内した国津神である。その後、故郷である

伊勢の国五十鈴川の川上に帰った。

伊勢市宇治山田の猿田彦神社と鈴鹿市の椿大神社が猿田彦を祭る神社である。

風貌は天狗にそっくりである。天狗のもとになったのは、猿田彦命かもしれない。

猿田彦を祭る神社は全国各地にある。関東では、千葉県成田市には猿田彦大神、銚子市には猿田神社がある。埼玉県では秩父市の椋神社、日高市の高麗神社、野々宮神社がある。

白鬚神社の祭神も猿田彦である。

また、天孫降臨の際に道案内したことだから、道の神、旅人の神とされ、道祖神と同一視される。

藤沢市の慶應大学湘南キャンパスの看護学校の近くに猿田彦神社があるが、これは道祖神であり、猿田彦の名を刻んだ石塔があるだけである。アヤマで有名な笹久保公園の近くである。

ある日曜日、私はこの石塔を見るために出かけた。笹久保公園の手前に十二台ぐらいが止まれる駐車場がある。ここは満車であったので、看護学校の駐車所に車を止めた。車から降りようとしたとき、突然腰に激痛を感じ、おろした足の膝ががっくりと

曲がった。それからは歩くこともできなくなった。ぎっくり腰になったのである。私はそのまま車に乗り直し、家に戻った。道の神に会いに行くつもりが道を歩けなくなったのである。何かの祟りであろうか。

二年前にもぎっくり腰になったことがある。朝の出勤時に会社の駐車場に車を入れ、玄関まで歩いていく途中で膝ががっくりしたのである。そのときは壁につかまりながら、何とか社内に入り、出会った同僚に、急にぎっくり腰になったので家に戻るといったのだった。家に帰ってから私はある総合病院に行った。三時間ほど待たされたあと、診察を受け、CT検査とMRI検査を受けた。が腰には何の異常も発見されなかった。私は医者の方箋をもらい、近くの薬局で湿布薬と沈痛薬をたっぷりともらった。

湿布と鎮痛剤の効果で三日ほどでぎっくり腰はほぼ治ったのであった。

今回は自分でドラッグストアに行き、湿布薬と鎮痛薬を買った。水曜日にはほぼ痛みが引いた。

くわしくは母も姉も空襲の時の話は私にしなかった。港区三田の家は焼かれ、知り合いの埼玉の家に一時移ったので、私も終戦になって塩原から埼玉に行った。

しばらくすると高輪の泉岳寺(赤穂義士のお墓)から当時の都電で一つ目の伊皿子にある父の会社の社宅に移った。家の近くに高松の宮様の御用邸があった。元の小学校はちよつと遠かったけど歩いて通った。すごく懐かしかった。担任の小坂先生が授業の後、私に職員室に来る様に云われて行くと、先生は「君が戻って来るのを待っていたよ」とあた、かい言葉を云って下さった。

小学校高学年になると、家は渋谷に移った。井の頭線で渋谷から一つ目、神泉駅から三分位の所にあった。帰りは道玄坂を登って帰る事が多かった。

渋谷は結婚する迄十年位住んでいたもので、凄く懐しい所だ。今は若者の街になって、時々ニュースに街が出て来ると、よくあの辺りを歩いたなあーと思いが呼び戻される。

当時、渋谷駅の周りに東横百貨店、東横のれん街があつてよく買物をした。又、駅の前に「忠犬八チ

戦後八十年

一 柳 愛 子

八月十五日戦後八十年を迎えた。終戦の時、私は九才だった。東京港区の小学校に通学していたが、戦争が激しくなると小学生だけの集団疎開が始まり、栃木県的那須塩原に行く事になった。姉と私(小学校二年生)も皆よりちよつと遅れて疎開した。疎開先は「あさひ亭」と云う旅館だった。旅館の裏は川があり、橋を渡ると露天風呂があった。友達とよく露天風呂に入った事を思い出す。戦中、戦後、日本は貧しかった。

父が時々面会に来てくれた事を憶えている、姉は一緒だったが、三才上だったので、中学に入学するので、戦争が終わる前に家に戻った。

三月十日の東京大空襲、アメリカ陸軍航空軍によつて実施された。父は勤めで家に戻っていないかったので、母は弟を背負い、姉の手を取つて今の東京タワーの辺り、芝公園や浜離宮に逃げ廻った様だ。

公」の像、飼い主の帰りを待って、飼い主が急死後
も駅前で、十年間位待ち続けたと有名だ。今の忠犬
ハチ公像は二代目だ。一代目は八十年前の空襲で無
くなっている。

敗戦八十年、世の中はどんどん変わっている。唯、
今も世界で戦争が続いている。

テレビ、新聞で先の第二次世界大戦で沢山の人が
亡くなり、広島、長崎への原爆投下がいかにすさま
じかったか、亡くなり、又、苦しんで生きてこれら
れた人達の話が伝わっている。

世界に戦争が一日も早く無くなる事を願ってやま
ない。

2025年8月13日

カリブ海の島々

梅澤輝也

カリブ海といえば、美しい海、陽気な音楽、大小
700以上の島、また海賊も思い浮かぶ。これらの

島の成り立ちは、大別すると火山活動、サンゴ礁の
隆起、大陸一部の海面上昇などに因る、そこには珊
瑚礁の白いビーチ、3,000m級の山、活火山、温
泉、平坦で豊かな土壌の島々がある。

コロンブス到達以降、この地域は欧州列強が
競って植民地化を進め、砂糖キビ、たばこ、綿花な
どの大規模農園にアフリカから奴隷が送り込まれ
た。20世紀に入ってから、独立や自治領への変貌
が歴史に見られる。この経緯から、ここには異なる
民族・文化の融合が生まれ、それがこの地域の特徴
となっている。

繊維に縁を食んだ私が、ここで真つ先に思いあた
るのは、シーアイランドコットン(海島綿)の産地、
バルバドス。恵まれた気候条件で育った、「幻の綿」
といわれる、この綿花は、一般のそれと比べ約2倍
の長い繊維でその織物は光沢のあるシルクのような肌
触りが特徴。エリザベス一世をはじめ英国王室に愛
用され、ひととき門外不出とされていた。

振り返ってみると私は、カリブ海の島とは縁があ
りそうだ。香港有力企業と合併で深圳に事業を立ち
上げたとき、会社の登記を収益非課税、タックスヘ

ブンにあやかかって英領ヴァージンアイランドとし
た。また、横浜大根橋でポランテアをしていた頃、
多くの豪華客船が、税制優遇、雇法規制緩和の目的
でバハマを便宜上の船籍とし、船尾に母港ナッソと
表記していたのを度々目にした。退職してから始め
たウクレレ・ソロでは、ある日、ジャマイカ・フェア
ウエルの曲を指導者が手本に弾くと、ミ・ファ・ソ
それぞれを根音(土台の音)とする調和音が美しく
響き、とても印象的だった。そこで私も、と試みた
が指使いが難しく、貰った譜面はそのまま長い間放
置していた。今度こそは、市民センター恒例の発表
会で、あの和音が美しいメロディに挑戦しようと思
い立った。

さらに、カリブ海の島でもう一つ、トリニダード・
トバゴ。今年はじめ、息子がこの国に着任し、周辺
5つの島国も兼轄する職務に就いた。息子からは、
時折SNSで映像が届く——澄んだ海、青い
空、豊かな緑の樹木、多彩な珍しい鳥、植民地時代
のレトロな建物、市場の賑わい、楽器スチールパン
など、などの・・・

いま、練習に取り掛かったジャマイカ・フェア

ウエルの曲は「夕闇の街は賑い、陽は山に輝く……
だが、かなしいことに、すぐには行けぬ……」と、
歌っている。

93歳、わが身の様々な現実をみつめ、私の心は大
きく揺れ動いている。

まだ望みは、まだ捨てきれない、もう暫く夢を抱
き続けていこう。

終り

人間は必ずぶきがある

〜親切さがある本当のかわいいところ〜

大島聖力

人間は接客が笑顔であると二度、三度会いたい気
持ちになる。店員さんはお客様に対して教えてくれ
ている、案内をしてくれている。お客様は店員さん
の態度を見てとても感じが良いと思うと年下の店員
さんでも大切にしたい、見習いたいという気持ちに
なる。食堂やカフェや観光地や公共施設でも会社の

制服やユニフォームがある。店員さんとお客様の見ているところは笑顔と服そうである。服そうがビシッて決まっていると店員さんは気持ちが変わりあのお客様と接客したい、お客様は店員さんに対して大切にしたい、教育をさせてあげたい、育てることをしたいという気持ちになる。

人は相手に対して悪いようなことをすると言った人間に対して欠点が出てくる。人にたよるのではなく自分自身で見つける必要がある。人のせいにはしないことになる。深くいうと気があわない人間は、あいさつはされない、お話はしたくない、お話をしても何もおもしろみのないつまらない人間でいてもめいわくになるというくだらない人間と思われる。まともな人間、常識のある人間に対しては行なっている人間のことを絶対にこわすようなことはしない方が行なっている人間の身のためになる。

人は言われなくても約束をしていなくても必ず会ってくれる人間がいる。行動をしつかりしていることであり一日も欠けていないでお会いしてくれるということはあきらめていないところが本当の人間のグランプリなところ。実行している人間に対して

ノスタルジック尾瀬

大村 ひろし

「二人だけで尾瀬にいこうか」

「うん」

梅雨明け間近い夕餉の席で、中学二年生になった末娘とそんな会話を交わした日から二週間ほどして、ザックをとりだして準備を始めると、

「あれ、お父さん、本気だったの？」

と、茶目つ気たつぷりにとほけて見せながらも、いそいそと好みの携行食をザックにしるばせることを忘れない成長期の娘を連れて、七月の下旬、二十数年ぶりに尾瀬を訪れた。

懐中電灯の明かりを頼りに暗いうちに歩きだし、大清水から三平峠を経て着いた尾瀬沼は、すでに陽は昇っているのに、さざ波もなくひっそりと静かで、鏡のような水面に淡い青空と逆さの燧が岳をくっきりと映していた。

その沼を右手に見ながら木道伝いに白砂田代、段

は本当に行なっているところを思うと出会うべきでいつも出会うてくれてありがとうということに幸せなことになる。人間のしつかりしている本当のところは店員さんでも知り合いでも相手のことを一緒にいたい気持ちでいたいとしたらお客様に対して次回いつこられる予定でいますか？とか、もしお時間がありましたら教えてほしいです、というきつかけや出会いや幸せになることにつながっていく。人間にはハートを持っているが変な話でラブレター以上にしつかりした本心を持つことになる。それだけ行なっている人間の行動をしている者に対しては必ず守るべきこと。人間として常識でいること。あきらめていない人間には笑顔でほほえむことをやってあげること。

お会いしてくれるという人間は気があう人間。想像以上に感じの良い人間と判断され言われなくてもこれからの世の中のことをわかるようになる。本当の人間の本心は怒るよりもかわいいところ、てれくさそうなところ、体にもぶきがあるのでおかしくさせない方が人間の行ないの安心が出来ることになる。

小屋坂を経て見晴まじに向かったが、沼尻で沼尻平への道を右に見送ると、白い湿原が近づいてきた。

細い茎の先に白い毛玉をつけたワタスゲが群生する湿原で、時折吹き渡る風が、その綿帽子のような白い毛玉をゆらし、白いうねりをつくっていた。

立ち止まってその根元をみると、アサヒラン、ゴゼンタチバナ、コケモモ、チングルマなどの花も精一杯の表情で咲いていて、私が愛用していた古いニコニー眼レフの扱い方を覚えたばかりの娘は、その花々の前でカメラを構え、しばらくの間全くの唾になつていた。

ところどころにある池塘では、オゼコウホネが、品の良い淡黄色の花を水面に浮かべていた。

見晴に泊まった翌日、竜宮小屋の方に歩いてみた。小屋の近くの流れ沿いで肥大化してお化けのようになつたミスバシヨウを見かけて驚いたが、その先、山の鼻に近づくと、まるで遊園地で出会うような途切れ目のない動く嬌声の列や、置き去りにされたごみ、そして二本の木道の間には排泄物とちり紙までが待っていた。それは、私の記憶のなかにある尾瀬、娘に見せたかった尾瀬とは余りにもかげ離れ

た尾瀬だった。

それから数年後、尾瀬の湿原を見たことがないという妻を連れてまた尾瀬を訪れた。騒々しい時期を避けての晩秋で、雨あがりの朝の尾瀬沼には、朝霧が立ちこめ、水面に一群の水鳥が羽根を休めていて、辺りは、まだまだろみのかにあるようだった。

尾瀬沼を左に見ての沼沿いの道は、散り敷いた落ち葉が雨水を吸ってしっとりとしていて、木道の切れ目から先はその柔らかな自然の絨毯の感触を靴底に感じながら長歳小屋の前を抜けて浅湖湿原にでると、そこには一面に草紅葉が広がっていて、雲に陽射しを遮られ、陰影の乏しい樺色の景色の向こうから、冬の歌声が聞こえてくるようだった。

「カオマンガイ」を探して

きんめだい

忘れられない味というものがある。忘れていた記憶というのが正しいかもしれない。

私はこの料理とタイで出会った。父がタイで仕事をしていたので、その出張中に遊びに行ったのが5歳のころだった。ホテル住まいの父の部屋に母と2人で二週間滞在した。ホテルと言っても、ベッドのスプリングがギシギシする、エアコンの調子も良くない、三流ホテルのようだった。ホテルの周辺も雑多な雰囲気漂う、タイの人々が生活する地域に近い場所だった。毎日の出来事がどんな風だったのかさっぱり覚えていないのだが、強烈に心に残る料理が「カオマンガイ」だった。父は仕事をしていたため、昼ご飯は母と2人で町に出かけた。町のいたるところにある食堂で「カオマンガイ」は家庭料理のような存在だった。鶏肉のゆで汁で炊いた白飯の上に、スライスした胡瓜と鶏肉を並べて、その上

に茶色のとろりとした液体が白飯・胡瓜・鶏肉の上にまんべんなくかけられていた。一口目で、鼻に広がる不思議な香辛料の味わいに驚いた。冷えた胡瓜と温かい鶏肉ご飯と茶色の液体が口の中で混じり合い、ただただ美味しくて夢中で食べた。日本に戻ってから「カオマンガイ」をねだる私に、毎日のように食べていたため味を覚えていたつもりも母が再現を試みたが、似ているようで似ていない料理となった。茶色の液体がどうしてもうまく作れないのだ。がっかりした私は、しばらくすると「カオマンガイ」を忘れてしまった。

この料理を思い出したのは大人になってから、エスニックブームが到来したからだ。アジアン、インドなど香辛料をふんだんに使った異国の味に、新しい食のブームが起きたのだ。私も都内の有名店や、口コミで美味しいという飲食店などに出かけ、また「カオマンガイ」をメニュー表に見つけることとなった。懐かしいな、どんな味だったっけ、という気持ちで口にしたのだが、思っていた味とは少し、いやかなり違っていた。大人になって味覚が変わったこともあるかもしれないが、現地の料理とは違う、どこ

か日本風にアレンジされた味に感じてしまった。これではない、この味ではないのだ、と心のざわつきが収まらなくなった。以来、「カオマンガイ」を色々なお店で見つけると注文して確かめずにはいられなくなった。あれから55年近く過ぎているが未だ出会えていない執着のある味なのだ。

もはやタイに行かないと出会えないのかもしれない。現地でしか味わえない何かがあるのかもしれない。味や香りや匂いは、出来事を思い出すきっかけになることが多いという。私はタイでの日々を「カオマンガイ」を食べることで思い出したいのかもしれない。目を閉じて薄ぼんやりと覚えている風景を、写真のようにはつきりと思い出せるのではないかと想ってしまうのだ。

スクエアダンスへの挑戦

久保田 文子

ママ友時代からの親友Yさんが二年間続けてきたスクエアダンス。見に来ないかと誘われ、社交ダンスのベテランSさんと一緒に興味津々、明治市民センターへ。

「大親友のお二人です」と紹介され暖かい笑顔と拍手に包まれる。同世代の方々も多く、二十数人の皆さんのダンスが始まる。四組のカップル八人が向かい合う。軽快な音楽と、コーラーさんのリズム感ある指示に従い前に後ろに、交差したり、腕を組み回ったり、どの方もとても楽しそう。

「一緒にやってみませんか？」との会長さんの呼びかけに、もはや断ることはできない。Sさんはスツと仲間入り。戸惑う私にはベテランの方がカップルになり、手を引いて下さる。

まずはご挨拶から。カップルと手を取りご挨拶。右隣、お向かいさんにもご挨拶。この始まりが何と

と感じた。

その数日後、箱根に帰省した折り、何と義姉が、「私はフラだけど、スクエアダンス知ってる。ドレスのスカートがふわつと広がっていて、箱根でもやっている人いるわよ」と。すごい！箱根でもと再認識した。

夜は粋な浴衣姿の義姉に付いて町内会館での盆踊りにくり出す。やぐら太鼓の音に合わせて輪になり踊る。「炭坑節」「キヨシのズンドコ」「東京音頭」これは踊れる。「箱根音頭」も久しぶり。さすがに最近の曲は見学。ピンクのロングドレスの若い女性のキレのよさ！着流しを翻し踊る背の高い男性のかっこよさ！ちびっ子の仕草の何とかわいらしい！浴衣姿の女性の皆さん、同世代はここでも元気いっぱい、どの曲も休むことなくしなやかに踊る。やっぱり私に合うのは盆踊りかな。「でもスクエアダンスも挑戦よ」そんな声と共に、華やかな笑顔が目に見えかんだ。

も暖かい。コーラーさんの指示は全て英語。「頭が混乱して間違えると八人全員に迷惑かけて。結構苦労するのよ」何でもやりこなすYさんの弁はこのことだったのか。

リードしてくれる先輩は、私の腕を引いたり押したり組んだり。ほぼ立ちっぱ状態の私も何とか踊るといふか、歩く。左右の足、逆だど気づいても、もはや直せない。顔だけはともかくニコニコ。ふとSさんに目をやると既にすっかり馴染んでいる。足の運びも軽やか。やっぱりな！と思い、笑顔に笑顔で返す。

最後のフリは「お帰り！で、次はお散歩よ」と先輩。再び手を取り歩けば元の位置。そしてそっと「お上手よ」ほっこり嬉しくなる。

調べてみると、スクエアダンスは十七世紀初期、ヨーロッパからアメリカに移住した人々が、それぞれ自国のダンスを変化させて作り上げたのが始まりで、今や世界中の人々が楽しんでいるパズルの、マステゲーム的ダンスだとあった。連帯感、対話能力、認知症予防など健康効果も確かで、楽しそうに踊る皆さんを見ながら、間違いなく「生涯スポーツ」だ

私の着地点

慶野 千賀子

私は、桜の美しい奈良県で生まれ、間もなく家族で、父の故郷である京都府に戻り、京都府で育った。根っからの京都人の祖母が、自分が習ったかった日本舞踊を、孫の私に物心ついた頃から習わせて、自分の生きがいとしてくれたお陰で、日本文化を自然と身につけることが出来た。

東京都の大学に進学。卒業後は、都内で就職。東京都は、様々な所から集った人々の街。都会のエネルギ―を感じ、10年間東京都民となるが、ちよつと疲れを感じたのも事実だ。

神奈川県出身の、夫との結婚を機に、鎌倉市を選んで新生活をスタート。神奈川県民に仲間入りした。鎌倉市は、タイムスリップしたような場所があり、歴史を感じる魅力ある土地だった。

でも、何故か私は住んでいる人達に、馴染めなかつた。

その後、夫婦で公園が沢山あり、子育てしやすい環境が整っている、藤沢市に移り住み、この地で息子を産産。息子は藤沢生まれとなつた。

気がつくくと、藤沢市での生活は、今年で30年。私の人生で、一番長く住んでいる地域だ。

海もあり自然豊かで、空を広々と感じることができ、富士山もよく見える。藤沢産の果物や野菜も美しい。綺麗な薔薇や蘭も栽培されている。温暖で、都会でもなければ田舎でもない。

若い人達の息吹が溢れ、四季折々の花が街を彩り、ホッとする様な優しさがある。

安住の地になりつつある、一番心地良い所だ。

藤沢で私は、多くの素敵な人に出会うことが出来た。

今までいろんな地に縁してきたけれども、私が見つけた私の着地点は、ここ藤沢。

父の思い出

小池 貴瓊子

私の父は僅か九才で三十六才の父親と死別した。長男の父は子供でも淋しい山道を独りで父親の薬を取りに瀬郷の医者迄歩いたという。今と違い辺びな田舎道だったという。

晩年父は「俺は子供の頃から苦勞の連続だった。」と振り返っていた。自慢のようだけど父は今の神奈川県工業高校で学校始まって以来の秀才と謳われていたと、後に私が勤めた会社の先輩の父親が元同級生との事で聞き及び知った。学校を出てから「東芝」の女工監督となり多勢の若い娘達を指導して仇名が背が低いので「とっちゃん坊や」と呼ばれていたそう。家庭の事情で退職してから小学校の訓導となり、四年生の男子の担任をしていた。所がその教師となったのは私の生まれる前の事だ。父はおよそ妻子への愛情を表現しない冷淡な感じの人で心では

思っても外に出せない不器用な面があり本来子供好きではなかつたようだ。昭和20年の五月、三才だった私を庭の防空壕に（B29が襲来したので）母は下の妹（夭折）を産んだばかりで父に私を防空壕に入れるよう頼んだ。私は真つ暗な壕に荷物のように小脇に抱えられてギヤァ／＼泣き叫ぶので父は「何を泣く／＼。」と怒り怒りその時の恐怖は今も尚心に刻まれている。私が十二才（小6）になった時、父は東京電力の藤沢営業所に勤務していたので独りでバスで来るように言った。目的はラーメンを食べたことがない私を遊行通りの三盛楼に連れて行ってくれたのはやはり親としての心情あつての事又高三の遠足の時も当時はバスが少なく父は自転車荷台に乗せて最寄りのバス停迄送ってくれた。成人（20才）となり選挙権が与えられて市民センター迄自転車に同乗して、投票を共にした思い出もある。私が20才になった事が心中嬉しかったのでしょうか？父の逸話で面白いのは50才位の時に薬局で髪につけるポマードを買おうとして若い女店員に「私がついこの間まで子供の時に流行ったポマード下さい。」と言ったら、女店員が思わず笑いこけて了ったとい

う。又どこかの駅で「向こうから背の低い醜い野暮な男が歩いてくるなあ。」と思つたら何と鏡に映つた我が身である事に気付いたとよく喋っていた。七十四才迄元気で「関東電気保安協会」の嘱託社員として大きな施設の電気の検査の仕事に一心に励み「俺はどう／＼何も仕事らしい仕事も残さず終わってろう。」と淋しそうに呟いていた姿忘れられない。父の九十七才八ヶ月の人生は確かに幸福とは遠く辛く苦しい事が多かったと思うけれど。そして最後の最後まで心から安心して死んで行けなかつた父の身を思う時、やはり娘としては父が可哀想でならない。憂き世は父にとり住みにくいことばかりだったと思う。立派な子孫に恵まれなかつたのも父自身の不運と諦める他なかつたと思う。全ては天の与えた「運命」と私は受けとめている。

「江の島、鶴沼の地を 散歩して思う事」

榎原 百合子

神奈川県藤沢の地には、三大弁天の一つのすばらしい弁天像がある。江戸時代には江の島詣でにぎやう程盛況であった。その証明は浮世絵でもわかる。多くの江の島、藤沢の地の歌舞伎をみてもわかる。稚児ヶ淵は、神奈川五十選にも選ばれている絶佳の地である。

この地が歌舞伎の場面につかわれている。狂言にもこの地は使われている。黙阿弥は江の島の岩屋を取りあげている。そんな江の島を昔、父と姉と犬と一緒に何度も散歩した事を思い出した。江の島の帰りには鶴沼の東屋の跡、まだ池があり、少し小さな食事どころもあった。父が言う、「明治の頃、おやとい外国人が日本にきて、英語を教えているその中で、なかなかの人物いたんだ。ラフカディオ・ハーン、帰化して小泉八雲だよ」「江の島を海外に知らせ

族の苦しみ、近代化への歩みの日本のおやとい外国人の使命等々、これからが佳境に入ってくるだろう。とても楽しみだ。

朝ドラになってうれしい。そして、ますます、私の江の島、鶴沼散歩も、明治時代の、八雲が人力車で、そして徒歩で、歩いた道を歴史をかみしめながら、歩く事としよう。

漂泊の文士であり、詩人であり、ジャーナリストであり、教育者であった八雲という人物も解剖し、その偉大さを私なりに発見してみたいと思うばかりである。

父と姉とシェパードのエンマと散歩した事が、今の胸のドキドキをしめる事に何か不思議を感じてならない。日本の松江、熊本、神戸、焼津、横浜、東京、そして湘南江の島、鶴沼の地を見聞した八雲に感謝を捧げたい。

た恩人だよ」「知られぬ日本の面影これは読むんだよ」「外国人が江の島を絶賛してくれるなんてうれしいじゃないか」と。「明治二十三年に来たんだよ」と。「鶴沼には明治三十一年だったかな、東屋に一ヶ月位逗留したんだよ」「鶴沼の海で泳ぎ、貝をひろい、蟹とたわむれて遊んだんだよ」「その頃の鶴沼の海は暑気楼があらわれて芥川龍之介はその本までかいたんだよ」と。「よかったんだねその頃は」と。

あの子供の頃を思い出して、私は一人江の島、鶴沼の地を歩いてみた。子供の頃とは、すっかり変わったっているが、父と姉とシェパードのエンマと散歩した事を思い出しながら、なにか頬をつたわる涙がでてきて、とまらなかつた。あれから、何十年の月日が流れて、父が姉が良く言っていた小泉八雲の本をこの頃真剣に読んでいる。父や姉が言う様になつてきた。やっぱり、ますます今後、くれゆく日本文化を、学び、守り、語りつがなければいけないと私は強く思いはじめたのである。

九月よりNHK朝ドラで「ばけばけ」が始まった。せつと八雲の松江での出会いからである。明治の士

「肉巻きいつ食べたんですか？」

白石 多美子

お母さん、いつ肉巻き食べたんですか？と、ほろ酔いかげんになると、婚殿の旅の思い出の切り口が始まる。「旅の楽しさとは、何度も同じ話をしては笑い合えることが最高である」と、娘夫婦と同居してつくづく思う。

まず我が家の旅は私が行きたい所を決めて計画し、婚殿は食べたい物を探し出しお母さん、一日三食じゃ足りませんとうそぶく。そして出発。

その肉巻きとは伊勢を旅した時のことである。食にこだわりのある婚殿は、お腹が空いたからといってそばにある物を食べず。でも私達は我慢できな

きない。名古屋に泊り二日目、伊勢神宮に行くことになった。途中渋滞にはまったらと、コンビニでおにぎりらしい物に甘ダレの豚肉が巻いてある肉巻きを四個買い求めた。案の定知らない土地での渋滞

は心細い。さっそく三人で肉巻きを食べ、渋滞に耐えてやつと伊勢神宮に着き、ぐるり見学した。古の参道巨木の杉。参拝する人は多いが、なぜか静寂な気が漂っているように感じた。やつとお昼。伊勢うどんを初めて食べた。もう一度食べたい位美味しい。ゆつくりしたかったが、次へ娘と伊勢真珠の店へ何軒か回った。可愛いピアスを違うデザインで買いふたりでご機嫌である。

興味のない婿殿は、あっちこっちの食べ物を見て、メンチカツをほうばりながら歩いているところを私達とドッキングした。「お母さん、今度来たら、あちらの牛肉鍋屋さんに食べに行きましょう」とうれしそう。本当に食べることが好きなのね。娘が赤福でお茶しようと言うのが長蛇の列。夕食は名古屋のひつまぶしを予約しているので、早々に帰るところにした。

車の中で私はウトウト。外はヘッドライトの光が続く。薄目でまだ渋滞してるのかとまどろんでいたら、お母さん、肉巻きはどうしましたかときた。「えっ」聞かれてびっくり。なぜかオドオドして、食べたいのと聞くとひとつ残ってたので気に

道連れ

杉山 榮子

何十年も前のこと、トニー谷という芸人がいた。黒の四角いフレームのメガネをかけて大きなソロバンを楽器のように振って調子をとって「アナタのお名前なんてえの」というフレーズを歌いまくる人気者だった。

私が秘書室勤務の時のこと、室長は受けた電話の第一声が「アナタのお名前さんは？」だったから、お名前さんというあだ名がついた。

昭和十七年生まれ私には同世代の友人に昭子と和子という名前が多い。昭和百年の今年からみれば十七年なんか昭和のスタート地点のようなものだから、希望にもえて昭和という文字を使って名付けたように思える。

母には十三人のいとこがいたが一番若い千という名前のいとこがいた。誰からも「センちゃん」と呼ばれていた。千ちゃんは自分の名前がイヤでイヤで

なつて。とつくに私のお腹の中に入ってしまった。眠気もさめ、こっそり食べたのを見つかつた子供のように、オドオドして小さい声で、食べたよ。

頭の中は大変。お腹一杯お昼食べたでしょ、食意地はって食べたの。いやいや別に食べたかったわけじゃない。もつたないから。心の中で理由をブツブツとつぶやく。いつ食べたの、娘が追い打ちをかけるように聞いてくる。てっきり寝てたと思つたから、いつ食べたか気がつかなかったねと、前の座席のふたりに大笑いされた。

それから何かにつけ旅行の話になると、お母さん、知らない間に肉巻き食べてるだもと話が始まり、笑いの種となる。それも楽しい。いつ食べたつていいじゃないと私は反して笑いこぼる。そんな話はいくつもあるので旅と話とお酒はつづくのである。

悩んだ末、名前の変更を決意し親に相談した。

父親は万造という名前。「万さん」と呼ばれていた。「俺が万だからオメエを千とつけたんだ。考え抜いた名前を替えたいとは何だ」ま、こんな風に答えたようだ。

万さんの姉は私の祖母でトラという名前だった。父親の反対で名前の変更ができない千ちゃんは泣きながらトラさんに窮状を訴えた。千ちゃんはここで百万の見方を得たのだ。

トラさんは自分の名前が気に入らなくて、「おトラさん」と呼ばれるのが苦痛だったから弟の万造に「万よ、おメエは姉娘にミヨなんて良い名前をつけて、妹娘に千なんてつけるたあなんだ。かええそうに名前を替えてやれ」と、こんな風に説得したと思う。

晴れて千ちゃんは名前変更の許可を家庭裁判所からもらった。長後郵便局に勤めていた千ちゃんは、局長に新しい名づけ親を頼んだ。局長の答えがふるっている。「万の下の子がイヤなんだから、万の上の億、その又上の兆、チヨウウコにしたらどうか。次郎長の女房もチヨウウといって良い女だったからよ」ウソのようなホントの話である。

千ちゃんは本当にチヨウコという名前が気に入っていた。今までのなりゆきで「センちゃん」と呼ぶ人毎に「チヨウコです！」と訂正した。氣立ての良い娘だと評判だった千ちゃんは信さんと結婚し二人の男の子を育てあげた。還暦を前にして胃ガンを患い亡くなってしまった。死期を覚った時、葬式は戒名ではなく俗名にして欲しいと信さんに頼んでいたから望み通り「林兆子」で葬式は行われた。赤毛のアンは「マリラ、バラはバラという名前だからこんなにキレイなのよ。キャベツなんて名前だったら、きつとキレイではない花になってると思うの」と言った。

生まれてから死ぬまで、生涯自分につけられた名前については。いわば人生の道連れともいえる。心を込めてつけてくれた名前。もつと大切に地味でも良いから輝かせるような自分になっていかなくなくてはと自戒している。

で再現して展示してある。陶板は、窯で約8時間かけて焼く。茶わんやタイルと同じで土を使って焼いた陶器の板のこと。その陶板に1000℃以上の高温で焼きつけて再現したものが陶板壁画。2千年経っても色あせず色は鮮やかなまま。

展示室を全て歩くと4kmにもなる。特に、システイナー礼拝堂のすごく高い天井の全面壁画には圧倒されるばかり。実際の名画をじかに見るが如くの迫力と臨場感を味わうことが出来、そのすばらしさに感動で胸が震えるほどだった。

三日目は小豆島、直島へ。オリープ公園では有名なギリシャ風車があり、「土庄」では港周辺のアート作品を見学。次に、アートの島直島へ。人口2900人の島へ年間70万人の客が訪れる最近、脚光を浴びている島だ。

草間彌生作の有名な赤カボチャ、黄カボチャは海のそばにあり絶好の写真映えスポットだ。至る所にアート作品のオブジェがありその他、数ヶ所に美術館がありさすが、アートの島と言われる所以である。

この3日間はどこへ行っても海外の客がいっぱい

瀬戸内紀行

須田 とし子

2025年6月、3日間かけてツアーを利用して友人と二人で瀬戸内方面へ旅して来た。幸い雨は降らなかったが連日、30℃の気温で体力を消耗し大変疲れた。

一日目、新幹線で新横浜から乗り新神戸下車。北野異人館街を自由散策。淡路島へ行き淡路花さじき、うずの丘大鳴門記念館へ。夕食は付いていなかったので酒好きな友人と近くの居酒屋へ。私はレモンサワーなど飲んでいる内に、顔と体がポワポワとなりユラユラしてきたので一杯でやめてひたすらおつまみなどを食べた。

友人は大酒飲みのようにで何杯もお酒のお替わりをするのを見てびっくり！

二日目、徳島の大塚国際美術館へ。世界26ヶ国、190余の美術館が所蔵する古代壁画から現代絵画まで至宝の西洋名画千点以上を原画と同寸大で陶板

だった。旅行はとても楽しくリフレッシュも出来るし思い出にも残るが、家に帰って来るとどつと疲れが出てくる。

これからも思う存分、旅を楽しむためには脳と内臓と足腰が丈夫なことが必須となってくることを実感した旅だった。

がんばれ湘南ベルマーレ

高橋 章夫

湘南ベルマーレは元を辿れば1968年に創設された「フジタサッカークラブ」で1993年に始まったJリーグには1994年から1999年まではJ1で錦を削ったものの2017年までJ1とJ2を行き来していて、数々の監督や選手たちがピッチの上でイノチの汗と幾多の涙を流し、日本サッカーリーグの星、つまり優勝を目指してひとりひとりが戦った。

サッカーという競技はただ単にボールを蹴り合うだけではなかった。球筋ともに様々な過去や想いが重なり、「キャプテン翼」という少年向け漫画に登場するのは1981年から少年ジャンプで連載されてきたもので、83年からはアニメ化もされて、サッカーは実に楽しいスポーツだということが日本だけではなく世界中に拡散されたのだ。

楽しいだけではなく、サッカールールに「オフサイド」というのがあり、プレーの中でゴールキーパー（GK）にひとりの選手が立ち向かうのはペナルティであり、もう一人GKに近い選手がいたらOKなのだ。サッカーにおいても得点して勝利するという事は、ひとりだけ足が速くても、パスの上手い人がひとりだけ、ひとりだけ背の高いヘディングの上手い人がいたとしてもなかなか勝つ事は難しいスポーツだと「湘南ベルマーレ」さんの歴史を振り返っても伝わってくる。

TV、近年では衛星放送とか各スマホアプリから中継放送も視聴することが気軽に出来るようになって

たのもあってサッカーは日本でも何かしらJリーグとか選手とかのニュースが流れるようになってきたけれど、1980年代には日本プロリーグもなかった。その状況でWカップに出場しようと思いたければ、アジア予選というハードルがあったり、「ドーハの悲劇」でアディショナルタイムから失点された事もあったりした。

「キャプテン翼」の中で表現していたのは、日本代表がワールドカップに出場して、その延長線上にワールドカップの優勝もあった。それは実際に1998年フランスで開催されたWカップにおいて現実の日本代表が出場権を得るまでは作者の高橋陽一先生としての理想であり、サッカーファンの多くは単純に夢物語で、後に「横浜Fマリノス」の選手となる木村和司のフリーキックが韓国代表のゴールネットを揺らした時でさえ、韓国代表と日本のチーム力の違いの大きさにWカップとの距離を感じずに居られなかった。

高橋陽一先生の描いたWカップでの日本代表の挑

戦はこれからも続くだろう。日本人と他の国の選手を比べたら、矢張り体格の違いがあるし、ひとつひとつのプレーに対しても丁寧さばかりとか謙虚さを求めたがる所が弱点とも言えるし、日本人だけが持つプレースタイルとなり得るかもしれない。

2018年から2025年現在までJ2リーグに降格せずここまで続けてこれたのは、ホームタウンのひとつが藤沢市なので、

「今年もJ2に降格しませんように」と毎日お祈りしている為というのものもあるかも知れないのだが、今年はどうだろう・・・勝利の女神様いらっしゃいますか？

怖いよ

竹内圭子

怖がりである。物覚えが良かった頃から現在までずっと。

倉敷にある実家は三百坪もある大きな家だった。

五、六歳の頃のある夏の夜、昔の家特有の広いろう下で、草木が生い茂った庭を見ていると木の音がピカッと光った。体が固まった。光の中から何も出てこなかったが、あれはいつた何だったのだろう。次はイタリアのヴェニスのホテル、夜、娘と二人でベッドに寝ていたら体が重苦しい。何かが上に乗っかっているようだ。目を開けようとしたが開けられない。ワーワーと叫んだらしい。娘が「どうしたの？」と体をゆすつてくれて目が覚めた。金縛りか。電氣をつけて寝ていたが何故か電氣が消えていた。翌日、そのことを添乗員さんに話すと、「イタリアのお化けは電氣をつけたり消したりするんですよ。」ひえっ！

極めつけは二、三年前のこと、リビングの端っこの隙間に死神の電氣がした。顔も体も見えない。電氣だけである。いよいよお迎えかと思つたがまだあの世に逝きたくない。姪っ子に相談したら風水を教えてください。黄色いもの、鈴のように音がするもの、家族の写真、そして観葉植物を置く。置いてみた。あから不思議、電氣が無くなった。これはいわゆる思い込みだろうか。

幸いなことに私には靈感がない。わがムコ殿には靈感があつて、返子の家にいた頃、井戸から黒い人影が出てきてリビングのドアの前を通り抜け、玄関に行くのを見たそうだ。怖いよ」

菜の花のへんろ道

竜田孝則

帰郷したとき、母の供養もかねて、五番さんの地藏寺まで行ってみようかと思いついた。

五番さんへは、菜の花畑の間を縫うように遍路道を歩いていく。首笠に白衣のお遍路さんたちが、菜の花の間に見え隠れして歩く様子は、心がほどけてくるような光景である。

五番さんは、小高い山のおもとにある。本堂の左の石段を登った高台に、奥の院の五百羅漢堂がある。五百羅漢堂は、正面の釈迦堂と大師堂、弥勒堂を廻廊でつなげたコの字型の建物である。五百羅漢

像は、その廻廊に祀られている。廻廊には窓がなく、提灯の灯りが羅漢さんをほんやりと照らしているだけである。羅漢さんは、腰ほどの高さの基壇に祀られている。ほのかな灯りに浮かびあがる羅漢さんは、鮮やかに彩色された、等身大の木像である。提灯の灯りのせい、肉感的ですらある。血色のよい頬、濃い垂れ眉、にやつき物欲しそうな分厚い唇、赤、青、緑や金色に彩色された派手な衣と、かなり怪しげな羅漢さんもおいでだ。薄暗い中にこんな羅漢さんがズラリと浮かび上がってくると、申し訳ないが、少々薄気味悪くすらなってくる。

羅漢さんたちがおいでになる廻廊に足をふみいれると、ひんやりとしたかび臭い空気に包まれる。薄暗い廻廊は、先に行くほどほの暗くなっていた。目をこらして廻廊の先を見ると、女の子が二人先のほうを歩いている。しっかりと腕を組み、ほとんど走り出しそうであった。二人は珍しいことに着物姿で下駄ばきだ。私は、つい足早になり、後を追うような形になってしまった。すると、女の子たちは悲鳴をあげ、下駄の音をカタカタならしながら走りはじめた。そして、すぐ近くの引き戸をあげ、外に走りだ

していつてしまった。謝ろうと思つてあとを追つて

外を覗いてみたが、庭には誰も見当たらなかった。

一歩外へ踏み出した途端、強い風が音を立て山の上から吹きおろしてきた。風は庭の木々を大きく揺らせ、砂を巻き上げて目前に広々と広がる沃野の大空に吹きあげていった。女の子たちの笑いさんざめく声が風とともに大空のかなたへと遠ざかっていったように聞こえたのは、私の錯覚だったのだろうか。

ふと、母の言葉を思い出した。「そろそろおとろしゅうてなあ、友達と二人でとび出してしようたんぜ。外に出たらなんやらおかしゅうて二人で笑い転げてしようたわ」。

私はその場に立ち尽くしてしまった。

人は生まれ生まれ、死に死に死んでは、また生まれる。そして時の廻廊を幻のように流れ過ぎていく。

私もそのあわいにたゆとう幻にすぎない。時の廻廊のなかでは、現在や過去、未来という区別など、あまり大きな意味をもたないのかもしれない。そんなこの世の秘密を垣間見てしまったのかもしれない。

「三島由紀夫生誕百年に思うこと」

富安 千鶴子

今年には戦後八〇年、原爆投下八〇年、昭和百年、ラジオ放送開始百年になる。この年、日本の近現代史、文士達の歴史に思いをはせてみた。私の住む鶴沼には、かつて東屋という文士の逗留宿があった。芸術文化発祥の場所といつても過言ではない。三島由紀夫も、鶴沼に親戚が居していた関係から、何度かおとずれたと聞いている。秋空の雲の美しさをながめながら、少しばかり木々が色づいている鶴沼の散歩をしながら私は考えた。日本の文士の歴史の中、おそらく一位、二位を占めるであろうと思われる三島由紀夫。勿論私が思うのである。三島は昭和四十五年十一月二十五日自死した。三島事件である。時の総理大臣は狂気の事件となげいた。当然だろう。

世の中は震撼した。しかし、天才文士の仕事は国際的評価は高く三島研究、三島学はゆるぎないもの

である。著書、原稿、幼少期よりのノート、戯曲、舞台、映画に至るまで、天才振りを發揮している。作品に流れる旋律は日本人特有の美しさが感じられる。三島の最後の時はドラマチックで激烈だ。批判する人も多いただろう。三島の人生をみると、戦争という背景、そして敗戦の背景が三島にとつて大きなものであったに違いない。昭和二十三年発表した「仮面の告白」は、三島自身が遺言だと言つていた事をとつてみてもわかる。

昭和三十三年結婚、日本画家杉山寧画伯の長女である。日本女子大学在学中の見合い、結婚、川端康成が媒酌人であった。川端は文学上の師であった。これから、幸福な家庭生活が続くはずであったろう。しかし、天才文士の人生は死の彷徨へと舵をきってしまった。三島の死を思いながら、昭和という時代を考えざるをえないのである。そして、生きて、日本、海外への文壇、評論への道を極めてほしかったと思うばかりの心の内である。

今年の夏の終り、日本経済新聞社の論説委員で大学教授、ジャーナリストの知人が三島由紀夫大賞を授賞された。「三島由紀夫の迷宮」という著書であ

もしもあの時 わが一命は？

西野 洋 司

わが家では昔から先祖の残した畑が、家から五分ほどの山王町にあり、父は郵便局勤務だったので土曜日は〈半ドン〉といつて午後には家に戻り、払下げのポロリヤカーに堆肥と下肥を積んで、まだ幼かった私が後を押して度々通った。作物は小麦、粟、玉葱、甘藷、トマトなどだった。

私は農作物に飽きると下の田圃の中を流れる小川へゆき、泥鰌やお玉杓子、海老を捕まえて遊んだ。

そしてもう戦争も終り近い頃だった。どういふ縁だったかは聞かなかつたが、家から一里ほどもある円行という処に無料で貸してくれる畑があり、父とよく通った。あの頃戦争で多くの若者が兵役に取られ各地に畑が空いていた。草を生やして置くより使つてもらつていた方がいいと聴いていた。

私は小学四年生、大して役にはたたなかつただろうけれどよく麦踏みさせられた覚えがある。父も

る。九月後半、記者クラブの授賞の折スピーチを頼まれた。理由は私の大叔父が東大の医師で韓国の病院長、樺太病院長で三島の祖父の樺太庁官の交友や、三島夫人の父上杉山寧画伯に日本画を師事していた事が理由である。私が三島夫人に初めて声をかけたと言葉、「貴女が父が認めたお弟子さんね」だった。私は三島夫人のご死去の折、白亜の邸宅にまいった。そして、その帰り道に三島由紀夫夫妻の運命を考えながら、帰途についた事などをスピーチした。翌日、「仮面の告白」を本棚から取り出して、読みかえた。

天才文士三島は今後もやはり国内、国外当然ながら、永遠の輝きをはなつ事だろうと確信した。

一人でするよりは楽しかったのであろう。そんなある日の夕方近くリヤカーを引いて家に戻る途中、亀井野の現在の〈ワイワイ〉のあたりだったろうか、当時町田へ続くあの路は土地の人は〈軍道〉と呼び細かい砂利が敷かれていたが、アスファルトにはなつていず、側溝にはなぜか蓋がなかつた。すると背後からビューンという飛行音、父は私を側溝に投げ込み小柄な自分も跳び込んだ。すぐ前方の畑に土煙りが上がり、二機の胴太のグラマン戦闘機が手の届くような高さを南へ飛んでいた。私は意外と冷静だった。二人の飛行士が失敗したせいかな笑い合っていた。

父は若き日遊行通りの映画劇場裏の方にあつた長谷川柔道場に通つた黒帯で。腰ひねりの西野という特技があつたという。こんな時それが役立ったのかも知れない。思い出す度に感謝の念が込み上げてくる事件だった。

「文芸ふじさわ」編集委員を 辞するにあたって

新田 慎 二

このたび病を得て編集委員を辞することになった。約十五年間「文芸ふじさわ」と係わってきたが、特に後半の約十年間は「随筆」の編集委員を受けることになり、私の意識下では大きな位置を占めるようになっていた。

やり始めて数年は応募数の確保に意を注いだ。もともと投稿者のうち半数以上が前年からの継続投稿者で、新しく書いてみようという人が少なかつた。いかに新規投稿者を増やすか、それを優先課題として取りこんだ。

所属していた「文芸サークル仲間」へは当然として、「大学の校友会仲間」、「団地の知人」、「図書館の事務員」、「近隣の高校」にまで足を伸ばした。退職後初めてこの地に来たので、知り合いも少なく苦勞した。

ことになってしまった人もいた。これらの人達のやる気を何とか育てたいと思っているのだが……。文章が集まると読む作業が始まる。初めて書き始めた人が経験を積むたびに上達していくのにも喜びを感じた。誤字脱字、句読点の打ち方、題名の付け方、起承転結など、構成や内容が素晴らしくなっていく、事務局のご努力により、四月に冊子が出来上がる、もう一度読み返しながら冊子をなでる、うれしい瞬間である。

このような文芸冊子を発行してくれる藤沢市みらい創造財団に強く敬意を感じている。スタッフのご尽力によるものだろうが、先年藤沢市長より感謝状もいただいた。私はこれをもって編集委員を去ることになるが「文芸ふじさわ」が市民の文芸意欲を高め、歴史や自然に恵まれた藤沢市が、さらに文化度の高い都市になるよう祈念している。

そこで最も注力したのが朝の散歩の人々であった。

家の近くに「引地川親水公園」という素晴らしい公園があつて、早朝から多くの人たちが運動のため来園していた。この人たちに応募を勧めたのである。募集チラシをもって勧めるので、初めての人であっても、わりと気軽に話しかけることができた。聞いてはくれるが「やっぱり無理」と断る人が大半で、意外に難しいことを悟らされた。無理もない、手紙さえ書かなくなつてスマホで簡単に発信できるからなのだろうと。

しかしその過程で多くの友人ができるなど、思わぬ収穫にも恵まれた。やってみようと挑戦してくれた人は思い出すだけで約二十名になり、朝のウォーキングを豊かにしてくれた。歩いている人たちはじつに多様な人達で、その人達との会話は楽しいものであつた。サラリーマン時代、同一職種の人達と過ごしてきた私にとって、それは新鮮で刺激的な時間でもあつた。残念だつたことは、せつかく書く気になつても説明しているうちに、その人が資格要件外だつたことで、同じ団地であつても隣町で、以前は市内サークルに属していたが辞めたため要件を欠く

骨折

ネ コ ス ケ

日課となつている引地川親水公園へ散歩に向かう途中でつまずき、両手両膝をつく転倒をしてしまいました。動揺と痛さとはずかしさで、一刻も早くその場から立ち去りたいという気持ちで、なんとか家まで引き返すことができました。

よく見ればズボンは破れ、左足には出血をとまなう傷が見られました。骨折？も頭をよぎりましたが、激しい痛みもなくゆっくり歩ける状態だつたので、その日はとりあえず様子を見ることにしました。

しかし翌日、左足の膝周辺は腫れあがつてしまい整形外科を受診し、レントゲンを撮るとやはり骨折でした。手術をする程ではなかつたのですが、骨が付くまで太ももから足首までのサポーターを装着し、固定することとなりました。その時は、痛みよりもほんの些細なことで骨折してしまつた自分が、

とても情けなく思いました。

以前、同世代の友人から階段を踏み外して骨折した、車のドアに手を挟んで中指を骨折した、などの話を聞きましたが、日常生活の中でも、骨折の危険は十分にあるという恐ろしさに改めて気付きました。

外出は可能でしたが、バリアフリー化が進んできたとはいえ、道路や建物にはまだまだ小さな段差があります。また私の家の扉から玄関までの階段には手すりがありません。この機会に、住宅の見直しも必要だと思いました。

約二ヶ月でようやく骨はつきましたが、今度は骨密度が低下し、骨粗鬆症の診断が下され、さらに大きなショックを受けました。

治療法は骨密度を高める注射を月に一度、一年かけて打っていくというものです。その他、カルシウム、ビタミンDやK、タンパク質を摂取する食事療法と、散歩や片足立ちの運動療法も効果的だそうです。

まさか自分が骨粗鬆症だったなんて・・・一時は落ち込みましたが、骨折をしなければ気付かなかっ

特効薬だ、因みにストマイとはスプレストマイシンという注射の薬だ。毎週尻に打たれた。痛かった。

私は、昭和21年の夏に生まれ、8才の秋感染「小学一年生」入院した。入院施設は住んでいた所から二時間ほどの小さな診療所の離れた一角にあった。

病棟は、小高い丘の上であり、人家、人里からは距離のある隔離病棟だ。木造平屋の小さな家だ。まんな中に廊下、便所と洗面所は共同で、風呂は無い。片側に8帖の間が2つ、昼敷きの室、そこへ布団を敷いて、母と3才の妹、3人での生活が始まった。父は仕事があるので一人での生活だ。

まあ、3千円ぐらいで泊まれる簡易宿泊施設を想像して欲しい。

食事は、長い廊下を通って、父の勤めている会社の寮にある食堂の厨房から、母が毎日運んでくれた。

看護師さんは、特別の時以外は来ない、全ての看護は母の手に委ねられた。

母は、私の四六時中の看護、妹の世話、離れて暮す父の世話と、本当に大変な日々であった。

入院患者は私の他に、近くに住んでいた二年下の男の子、高齢の女性、品の良い笑顔の絶えない優し

たことです。逆に考えれば早期に見つかり、治療も受けられてよかったのかもしれない。

半年が過ぎ歩行も安定し、ようやく引地川親水公園にも行かれるようになりました。久々にお会いした皆様に温かい言葉をかけて頂き、感謝の気持ちで一杯になりました。

まだ治療を始めたばかりですが、食事や運動も取り入れて、私の骨が元気に育ってほしいと思っています。

日々雑感 そのII

蓮池 高夫

いつの間にか79才になってしまった。

「長く生きた」という感じが、時々頭を過ぎる。

バス・ストマイ・ヒドラジッド、聞いたコトのない単語、私は8才の時からこの言葉を忘れていない。忘れられないのだ。

昭和二十年代、三十年代に当時は席卷した結核の

い感じの方だった。たぶん60代後半か70才代初めぐらいかな。旦那さんがよく看護されていた。の三組であった。

その品のよいオバサンは、ご主人の期待する早期快方に向けての治療法を受け入れて、肺の手術に踏み切った。

うまくは行かなかった。オバサンは体力的に手術に耐えられず、術後、息を引きとった。悲しい出来事だった。

旦那は、悄然としながら病棟を去っていった。夫婦とはかようなものかと、今にして、思う。

雪の深い、風の強い所であったが子供心にはさほど苦にはならなかった。そこ以外の土地のことは全く知らないのだから、それが毎日のことであっても自然なのだと感じていたのだ。何も無い、夏・秋と季節は見えても、荒涼に近い風景だった。

入院生活は二年に及んだ。その後、自宅での療養がしばらく続き、かれこれ三年ぐらい学校には通えなかつた。

入院中には、いろいろなドラマがあったが、折を見て書き留めることとしたい。

昭和100年の今年、70年前の子供時代の記憶だ。只、父母の労苦を思うと忸怩たるものが募る。了。

今日このごろ

畑 昌子

夜汽車の窓明らかにあのあたり——。父と母兄弟五人で過ごした所。あの頃は何もなくてそれだつて楽しくやったヨ——メロディの歌詩そのまゝに大きな盥に井戸水を汲み弟達の学生服の袖を力いっぱい洗つた。

井戸の中に西爪を下げて覗いた日。いろんな具材の入った闇カレー//を電球の下笑いながら食べたあの日。努力すれば何でも手に入るこのごろ——。私はベランダから列車を見る六時半雨戸を開ける。犬に曳かれて植木場からアスファルトの道へ、いつもの雀が三羽ついて来る、カラスのカーキも電線の上から見ている。娘が「空ちゃんはダッコして鳥達を

見る」と言うのヨ、えーッという事と言いつ、「空だっこするか？」にお座りして上目つかいに私を見る。仕方ないナーばやきながら抱き上げると電線に止っている鳩もカラスも雀も足の黄色い鳥達もじつと見つめ合っている。何だこの犬は……。犬は外で飼うものと思っていたが我が家の一室はこの空海さまに占められてしまった。雀の話を前回したがあれから親から子へ雀達は私の車を追つて来る。御殿場に「はな」という喫茶店がある。そのこのコーヒーは事の他うまいノカウンターの客とも仲良くなり、ドライブの好きな私は娘とよく客になる。九十を超える方が写真や絵を見に寄つてとマンシオンに誘われた、立派な室に所狭しと御自分の作品が並んでいる、この室の他もう一つ自分の室があるのだそうだ、目を瞠るマンシオンに訪ねる人がいないのかな——と。

弥勒寺町のセボネ「水道みち」

林 田 繁 雄

弥勒寺の町にはセボネがあります。

岡の上から南に向かつて下り、東海道路線にぶつかるまで、南北を貫く道路がセボネです。巾4m足らずのセンターラインもない生活道路ですが、「水道みち」と呼んで親しまれています。

半世紀前に越して来た時、まだ町にはなつておらず、字(あざ)を使っていました。

300m先の東海道路線まで見通せる程、空地ばかりでした。水道みちは目印のように働き、位置関係を説明するのに便利でした。みんな水道みちを頼りにして来ました。

現在でも、「キミのうち、どの辺?」「水道みちをチョット上がって5階建てのマンションを右に曲がつて10メートルあたり」

水道みちを中心に位置関係がすぐに呑み込めていいます。

この水道みち、実は、近代の歴史的遺産なのです。正式名「横須賀軍港水道」日本海軍が軍艦に新鮮な水を供給するための水道管を埋設した道路なのです。明治45年工事着工、大正10年完成。神奈川県川村半原から横須賀の逸見浄水場まで53キロ。川にさえぎられれば、水道橋となり、山にぶち当たればトンネルを貫き送水する。地図を見て、確かめるとおもしろいです。交叉点は、しばしば直交していなくて、斜めに交わつたり、寄つたと思つた道路がまた離れたり、全て、水道みちの都合を優先しているのです。

戦後は横須賀市に移管され、平成19年4月まで使われました。つまり、我が家が越して来た時には、まだ水道は生きていたのだ。

弥勒寺町周辺には、舗装はされていても、まだ拡幅されていない水道みちも残っています。その路肩に、この道路が、軍港水道であったという証拠の遺跡が幾つか見つけられました。

おでこの笑いじわのような三角波に「海」が彫り込まれた石標です。道路脇の人家の塀の下などに、ひっそりと埋め込まれています。

今回、インターネット等で調べてみて分かったことは、水道の出発地も終点も、だいぶ変わって来ているらしい、でも歴史的遺産ということも意識していると読み取れました。

全長53 km、北へ30 km海沿いへ東に20 km、藤沢弥勒寺町は、その中央の良い所に位置しています。各地で水道みちがどのように生活に結びついているのか、確かめに行こうと思っています。

私的 お医者さん 考 1

ヒラサワ タカシ

2025年4月。「带状疱疹」にかかった。ころあたりがあるような、ないような、アレルギー疾患である。

4月10日ごろ、普段は食べない弁当を食べた。特注の弁当である。特注なので、初めて食べるような食材も使われている。

で、お薬を塗りましょう。」と、言ってくれた。

それから 毎日 朝いちばんか、午後の診療時間にあわせて、医者に通った。 連休の時期でもあり、合間に、毎日通った。

看護師さんも、「少しは かゆみ、治まりましたか」と言つて、丁寧に薬を塗ってくれた。先生にも、診ていただいた。

5月10日ごろ、発疹は収まった。 忙しい中、先生の「毎日でも 診ますよ」の言葉に甘えての医者通いだっただ。 先生の確かな診断と治療に感謝する次第だ。

再発はしていないが、忙しい中、診て下さった先生に感謝している。

なにことも、分を過ぎると体によくないと肝に銘じ、気をつけている。

大手のお弁当屋さんの特注のお弁当。ちょっと値も張るが、おいしいだろうと、二つ買い、昼と夜に食べた。おいしかった。

それから 2、3日して、なんとなく、腰のあたりがかゆい。季節も春先だから、「そんなこともあるかな」と、思った。だんだん、背中から肩のあたりも かゆくなってきた。

20日の午後、風呂に入るため、裸になったら、半身赤い発疹に覆われている。

「これは 大変だ」と、すぐに いつもお世話になる 皮膚科の先生のもとに 連絡をした。すぐに診てもらえた。

「ころあたりは ありますか。」と お医者さんは言った。

「多分、特注の 弁当かと。」と 答えた。

お医者さんが、「塗り薬と お薬を出しましょう。手がご不自由なようなので、毎日でもいいの

電車通学にはご用心

藤城く に

昭和四〇年代初め、私は高校生になった。

電車通学するのを楽しみに期待していたのだが、その思いが甘かったことに気付くのに時間はかからなかった。

その頃の朝のラッシュアワーにはすさまじいものがあった。電車がホームに到着し、下車する人たちが全員降りきるや否や、列を作つて待っていた人たちが我先にとドツと車内になだれ込み、ポーツと立っていると否が応でも自動的に奥の方へと送り込まれてしまう。

もうどう見ても満員なのに、無理やり乗り込もうとする人の背中を駅員が足を踏ん張って両手で押し、何とかドアが閉まるのだった。

電車が走り出すと、車体が前後左右に揺れるものだから、不安定な足元を何とかしつかり保とうと、常に重心の置き方に気を配らなければならな

かった。

時にはカバンが人と人の間に挟まれたまま持つて行かれそうになり、やつとのもことで持ち手を握って耐えた。他人と接触したまま次の駅までじっとしているほかは無かった。

下車駅で降りようとしたら、ドアに近づくと前に、乗車する人の波に再び奥へと押し返され、ドアが閉まってしまったことがあった。

次の駅でどうしても降りようと少し進んだら、今度は同時に降りようとする人たちに囲まれ、もみくちゃになったまま、あれよという間に車外に放り出されていた。

そこから一駅戻ったのでは遅刻してしまうので、二駅を結ぶバスに乗って学校前で降りようと考えた。同じ制服が目立つ列を探し、いかにもいつも利用しているような顔をして乗り込み、無事に学校に着いた。

下校時は混雑が無く楽だったので、座って本を読むのが常だった。

そんなある時、そろそろ降りる駅が近付いた頃だと思ひ顔を上げると、車窓からの眺めに違和感が

ズンバは楽しい健康体操

松本 実知子

地域ささえあいセンター「きらり」が近所に出来てから、ちぎり絵、ピラティス、スマホ相談等で色々利用してきた。

何より自宅から歩いて5分の近さが良い。参加費が無料なのも助かる。残念なのは、ほとんどのものが月一回なので、体操には物足りない。しかし、今のところ他に週一の体操サークルにも参加している。整形外科のリハビリにも通っている。もつとも、体操サークルの方は場所が少々遠いので、たびたびさばりつつも何とか続けている程度だ。

リハビリは、一般的な体操とは意味合いが違うが、それでも終わった後は、関節に油をさしたように足取りが軽くなり気持ち良い。体操サークルも行くまでは面倒だが、帰りは心地良い疲れを感じながら歩く。

やはり、年を取ったら意識的に体を動かす必要が

あった。しまった、電車は次の駅のホームに滑り込んでいくところだった。

ここで慌てた様子をするのはみっともないので何食わぬ顔で下車し、精算を済ませて改札口から外に出た。

その駅から、一駅戻ると戻りすぎになるので、やはりバスで中間の家近くにある停留所を目指すことにした。その路線は途中海沿いを走る区間があり、おかげでドライブ気分を味わって、いつもとは違う新鮮な経験が出来た。

その時は失敗に違いなかったが、今となっては通学にまつわる懐かしい思い出だ。今、電車で通学と同じ区間をたどる時、車窓からの風景の変わりように驚きながら、私の眼はそのころの面影を探している。

あると思っていた時に、「きらり」の予定表で見つけたのが「ズンバ」だった。南米の音楽に合わせて、エクササイズをするというのに興味を引かれた。

音楽に合わせて体を動かすといえば、駅前のビルでやっている音楽教室でも似たようなことをしている。これはシニア向けで楽譜が読めなくても大丈夫という宣伝文句に惹かれた。内容はシニアが良く耳にしたことがある歌をうたいながら、ステップを踏む、歌が主で、体を動かすのは従だろうか。中には早くてついていくのが大変な動きもあるが、失敗しても皆で笑いあうのが楽しい。これも始めてから二年は過ぎた。

そんな下地もあり、音楽に合わせて体を動かすという「ズンバ」を体験したくなり申し込んだ。

当日会場に着くと、知り合いの女性が目に入った。近所に住むピアノの先生で、息子同士も友人である。言葉を交わすのは久しぶりだが、元気いっぱいのような。十一月から参加しているとのことだ。会場は狭いので定員は一八名で、全員参加だ。

「ズンバ」はラテン系の音楽をダンスと組み合わせさせて創作されたエクササイズだ。コロンビアで考案

され、世界に広まったとネットに出ていた。

最初は、聴きなれない音楽のリズムに合わせるのは難しかったが、先生に導かれて体を動かすのは楽しかった。ステップと共に、手を大きく動かすことが多いので肩こり解消にもなりそうだ。手を振り下ろす動作は、サトウキビを刈る動作を表しているとのこと。ますます異国情緒を感じる。今までの体操とは一味違った雰囲気面白い。

今回は五月一二日で予約受付は二一日からだ。早めに予約しよう。

人生の応援旗

松 与 常 清

「忍耐すること、辛抱すること。そんなことはわけないことだ——ちえつ、なんて苦労性な」「堪え忍ぶことがすべてなのだ」「きみの最も苦しい経験はなに?」「生まれたからには生きねばならぬ」「ままにならぬが浮世」「苦痛と至福とは同じ神の顔の

ない。

人間は自分の弱さ悲しさを知った時、人生の杖、人生の支えを必要とするのではないだろうか。私は私の人生の中で万能薬とは云えないかもしれないが、引用した諸語句を思うのである。心がもろく挫け易くなった時、思うのである。他者の言葉、語句の引用、ヒントであろうと鼓舞に近いものを感じるのである。共感というか共鳴というか、心の琴線に触れる言葉や語句に出会えることは、ある種の幸いではなからうか。

人間はそれによってカタルシス、もしくは癒やしを感じ得るのではなからうか。

たとえ現世に地獄を見出したとしても、人生の真清水、人生の泉に触れ得た思いをするのではなからうか。

人生に人間に愛を感じ得るのではなからうか。

七十六歳の今、私は、若い時聴いたある方の言葉を思い出し反芻するのである。

「いろいろあっても、結局人間が好きでなけりゃならないんだよ」という言葉である。

時に、人生否定、人間否定に陥ることがあっても、

二つの側面である」「苦痛というものは、詩的な価値と同様、人間の価値にとつてもその本質的な源泉である」これらの語句によって大方私の人生は支えられていく。私の苦難などたいしたものではないかもしれないが、それなりに私の人生の風雨をしのいでいる。といって、これらの語句で人生万般のことが解決する訳でもない。

私は「爽やかに心の牧歌奏でつつ」「大晦日こゝに生きとし生けるもの」「下萌えぬ人間それに従ひぬ」の句を好み、そういう世界に憧れるものである。

しかし、私の現実には「煩惱の渦巻く長き夜の坐禅」「さばかりの事に死ぬるや」「さばかりの事に生くるや」「止せ止せ問答」と云った類のことが多いのである。

これらの現実を超える為にも先に述べた語句が必要となってくるのである。自戒の為とも指標とも云えるのである。

人生の悲喜、哀歎の中で、人間は悲や哀に直面する方が多いだろう。確かに「地球一万余回転冬日にこゝろ」ということもあるかもしれないが「人の世の悲しく」と鯛が」と思うことが多いかもしれない。

この言葉と、冒頭に引用した語句等をもって、私は私の人生の応援旗ともしているのである。どんな人生の強風に会っても、倒れないことを祈念しつつ愛と勇気をもって人生の諸苦難、万難を排していけるようにと。

思い出

儘 田 加 寿 子

アメリカ、ロサンゼルス郊外のガーデナ市に、私の勤めた、ガーデナ日本語学園が、あります。歴史は古く、日系の人々が、努力して作った学校です。その日本語教師として10年間子供達に日本語をおしえました。はじめは、どうすれば、子供達は心を開いてくれるのかと思いましたが、しかし何事も我慢、と思えます。子供達が笑顔を出すように、なつてクラスは明るくなりました。クラスの中で、孤立している子は、いまいかと思いをくばりました。日本語学校で運動会、盆踊り、おもちゃつき、お話し会、日

本の小学校の行事をアメリカ生まれの子供達が目を輝かせてやりました。子供は、どこでも同じで、素直です。もう一度、皆んなに会いたい。

あの教だんに立って、日本語で、あいさつをした
い。

魔法の紙

室川俊雄

五十代の頃のある日、右肩が急に痛くなった。しばらく様子を見ていたが治らないので、近くのY整形外科を受診した。

かなり高齢の先生は、右肩を動かして痛みの程度を聞いただけで、「四十肩ですな」と即時に診断した。先生曰く、五十歳でも六十歳でも「四十肩」とのこと。治療法はこれですと一枚の紙を渡された。

処方箋と思いきや、「アイロン体操」との表題で二つの絵が記載されている紙一枚。左手をテーブルについて体を少し前傾し、右手でアイロンを前後左右

に動かしている絵と、アイロンで円を描いている絵の二種類があるだけ。拍子抜けして絵を見ている私に先生が言った。

「この絵のようにアイロンを動かす。これがアイロン体操です。四十肩はこれを毎日やれば治ります」レントゲン撮影も、薬の処方もなく、診察はあつてなく十分余りで終了した。

家に帰り、紙のとおりアイロンを振り動かしてみてすぐに、アイロンが軽すぎるのに気が付いた。当時すでに、アイロンは合成樹脂製の軽いスチームアイロンになっていたのだが、老先生は重い金属製アイロンしか知らなかったようだ。

駅前のスポーツ用品店に行き、昔のアイロンの重さを出しながら同じ程度の重さの鉄アレイを買った。そして半信半疑で、渡された紙の通りに、毎日、「アイロン体操」ならぬ「鉄アレイ体操」を続けた。すると、三週間余りで右肩痛は完全に消えてしまい、あまりの効果に驚いた。

その後、肩痛で病院を受診した何人かの友人に聞いてみたが、全員、投薬、シツプ等の治療を受けていて、「アイロン体操」紙一枚だけの治療を受けた

人はいなかった。

もちろん症状にもよるのだろうが、紙一枚で、私の肩の痛みが完治すると見抜いたあの老先生は隠れたる名医だったと、今でも思っている。

Y整形外科は、その後、息子の代になり、近代的リハビリルームを併設した大きな医院に改築された。あの魔法の紙は息子に引き継がれているのだろうか。

人生の名言・名句を味わう

森 眞彦

新聞やテレビを見ても暗いニュースが多く、明るい話題の少ない昨今である。先人が遺した名言・名句には、その人の人生と英知が凝縮されており、現代に生きる私たちの生きる指針になるものが多い。人生に迷いを感じた時や仕事に行き詰まった時に勇気と知恵を与えてくれる。私にも心の杖にして苦難を乗り越えることができた名言がいくつかある。

気は長く心は丸く腹立てず

人は大きく己(おのれ)小さく

これは、漢字の書き方で処世訓、つまり世渡りに役立つ教えを説いた句である。気という漢字は縦に細長く書き、心という字は全体が丸くなるように書き、腹という字は寝かせて横向きに書く。人という字はそのまま大きく書き、その下に己という字を小さく書く、ということである。「言うは易く、行うは難し」かもしれない。

やってみせ言つて聞かせてさせてみて

褒めてやらねば人は動かじ

太平洋戦争の頃、海軍大将であった山本五十六が残した有名な言葉である。先にたつて模範を見せる。言葉にして説明する。実践させる。最後に、褒めることでやる気を引き出す。そのようにして、人は初めて立派に行動できるようになる。この言葉には人材育成で大切なことが凝縮されている。四つのステップの実践で相手の成長を促すことができる。

おきな児がしだいしだいに知恵づきて

仏に遠くなるぞ悲しき

生きとし生けるものは皆、仏教という仏性(ぶつ

しょう)、言わば、きれいな心を持っている。現代人はさておき、昔の人は、子どもはみんな神さまや仏さまから授かるものと考えていた。子どもはみんな、きれいな心を持って生まれてくるのであるが、大きくなるにつれ、いろんな知識や知恵を身につけて変貌していく。江戸時代に生きた禅僧、良寛さんは「子どもはみな正直で神仏と同じ」とつねづね言っていたという。

形見とて何か残さん春は花

夏ほととぎす秋はもみぢば

この句は良寛さんが残した辞世の句といわれている。若い頃にふるさと越後を後にして諸国行脚の旅に出た。四十歳で帰郷してからも清貧に生きた。最晩年に詠んだとされるこの句は「私が死んだ後に残すものとしてありませんが、あるがままの四季折々の美しい自然を愛でて、そしてその中にあるこの世の真実の姿を感じてください」といった意味なのだろう。自然を愛し、自然とともに生きた良寛さんらしい句である。

このような名言・名句を多くの人に語り継いでいきたい。名句を口ずさむのは気持ちよく、とりわ

け五七五七七の短歌の形の句は覚えやすく気持ちのいいものである。いろんな環境のなかで人生を支えてくれる自分なりの名言・名句を持ちたいものである。

シヨールンジャー

第七話 サンタはだれ？

作 森と泉

マーくん、サマンサ、たかし、さつちゃんは小学生四人だけのソフトボール部です。でも、またの姿はシヨールンジャー。四人は今日も知恵と勇気で活躍します。

クリスマスイブです。今夜は施設でクリスマス会があるので、シヨールンジャーの四人は行ってみることにしました。

雪が今ちようどやんだところですよ。

施設の中は大騒ぎです。「大変です。サンタがやってきてすぐに帰ってしまいました。プレゼントを車にとっさり積んで。お札を言いたいので誰かサンタを探してーシヨールンジャーがいてくれるといいんだけど。」

ちようど玄関にやってきた四人が言いました。

「シヨールンジャーはここにいますよー」

サマンサは言いました。

「ちよつと車を拝見します。おや？何かを貼った跡があるわ。」

「指の跡と・・・これは爪かしら？」

マーくんやさつちゃんは施設の外で雪に残った跡を調べています。

「建物の外に帰った人の足跡は見当たらない。」

たかしが大きな声で言います。

「サンタはまだこの建物の中にいるー」

さつちゃんが言います。

「車を運転するみなさん、車に貼るバッジを持っていたらちよつと見せて下さいな。」

みんなは、初心者マーク、高齢者マーク、身体障害者マーク、聴覚障害者マークなどを差し出しました。

「お姉さんがサンタですねー バッジの跡と長い爪で分かりましたよー」

「どうして分かったの？私、お札を言われるの、苦手なんです。」

「お姉さんサンタで良かった。だいたい、かっこう見れば分かるじゃん？」

施設の男の子は、お姉さんがサンタの服を着ていたの、初めからきつとそうだと思っていたようです。

お姉さんがひとりひとりにプレゼントを配ります。

「メリークリスマスー良い子にはプレゼントをあげましょう。」

「ありがとう。」

お姉さんは「ありがとう」と言われるのが苦手なので、大汗をかいています。

「お姉さんサンタ、がんばれー。」

古稀を迎えて、拓く扉

山下 一馬

私は昨年11月に古稀を迎えた。杜甫の詩「曲江」に「人生七十古来稀なり」とあるが、今や男性の平均寿命は81歳、健康寿命は72.5歳とされ、70歳まで生きることはもはや稀ではなくなった。それでも「いつまで健康でいられるか」が、これからの課題のように思う。これからのことを案じる前に、これまでの歩みを振り返ってみると、一番楽しかったのは高校時代だった。仲間とギターでフォークソングを歌い、ESS部に所属して「何か面白いことをやろう」と英語劇『銭形平次』を上演した。目一杯楽しんだ結果、大学入試は全敗。浪人時代の一年間は、人生で一番勉強した時期だったと思う。大学に入ってからESSに所属し、ディベート（賛成側と反対側に分かれ、どちらの主張がより理にかなっているかを競い、審判が判断する競技）に没頭した。授業はほどほどに、ディベート大会に明け暮れる毎日

史や文化にも関心を持ち、ガイドクラブや郷土づくり推進協議会に参加して地元の家内・PR活動にも携わっている。孔子は『論語』の一節で、七十歳を「從心(じゅうしん)」（心の欲する所に従えども、矩を踰えず）と表している。好奇心の赴くままに生きていくつもりではあるが、節度を保っているかどうかは自信がない。まあ、誰かの役に立つことができればそれで良いのかもしれない。一方で、「老い」とは何だろうか。75歳、80歳、85歳と節目を迎えるたびに、体力の衰えを感じると言われる。竹内まりやの「人生の扉」では、「歳を重ねて弱っていくのは悲しいこと」「老いていくのは辛いこと」「人生には何の意味も無いのよ」と歌われているが、結びのフレーズでは「それでも私は、生きることには価値があると信じている」とある。これからの10年、ひよつとして20年、老いに抗わず、心の赴くままに、自分でできることを続けていく。それが何より大切なことなのではないかと思う。

だった。その結果、就職活動期を迎えたときには「優」（A評価）の数が少なく、大手商社や都市銀行はすべて不採用。そんな折、ディベート大会で競い合った他大学の友人から「外資系の銀行が募集している」と教えられ、面接を受けることになった。日本人の人事部長は、いきなり英語で「君は大学で何をしてきましたか？」と質問してきた。私はディベートの面白さや大会での戦績について話したが、面接の最後に「単なる英語屋はいりません。英語で仕事ができる人を求めています」と言われ、落胆して帰った。ところが数日後に連絡があり、結局外資系銀行で4年以上働くことになった。銀行員らしからぬ仕事ぶりだったかもしれない。1985年のブラザ合意以降はディールングループで外国為替業務に携わり、その後はデリバティブ（金融派生商品）の営業としてアジア市場を駆け回り、2017年に退職した。退職翌日からは、生活リズムを変えず早朝の散歩を始めた。毎朝顔を合わせる先輩に「しばらくは充電期間として何もせず、徐々にやりたいことを見つけてなさい」と言われ、やがてインバウンド旅行者の通訳ガイドを始めた。その後、藤沢の郷土

Nコンの思い出

山田 節子

猛暑に負けてしまいそうな日の午後だった。BSから爽やかな歌声が流れてきた。秋に開催されるNコン（NHK全国学校音楽コンクール）の県代表を狙う小学生達が、歌の練習に先だって、入念な体力作りから始まり、スポーツ選手さながらの筋力トレーニングなどに励む姿に、思わず釘付けになってしまった。

一九三二年に小学生対象に始まったNコンも、現在は小中高生が夫々「合唱日本一」を目指す大会として発展し、今年六十周年を迎えたのだそうだ。課題曲の中には、教科書に加えられ、広く歌いつがれているものも多いが、「花のまわりで」は、その一つである。

これが課題曲だった一九五五年、私は挑戦する合唱部の一人として参加していた。今でも、ふと口吟む自分に驚くことがあるが、あの夏休みの鍛練の

賜物かもしれない。私は小学校時代を山口県宇部市ですごしたが、戦後の復興期にあつて、工業地帯として空気の汚れた地域として知られていた。しかし、戦禍を免れた音楽堂（渡辺翁記念館）があつて、来日する著名な演奏家達が、「東京の次は宇部に」と、挙つて来訪し、音楽に親しむ機会には、恵まれていたようだ。

音楽室は怖い顔の作曲家の肖像画がグランドピアノを囲むという雰囲気だった。教頭先生が上野の音楽学校出身の方で、厳しかったけれど練習の合間に話された音楽の話題は子供心にもしっかり記憶されるものだった。

県代表になる夢は叶わなかったが、時折、学校放送の番組収録のため、電車に乗つてNHKの放送局まで出かけた思い出もある。テレビも、テープレコーダーも、身近にはない時代だった。

先年、卒業四十周年を祝う会に、はるばる出かけた。久々に会えた当時の仲間たちは再会のよろこびを伝えあうのもそこに、歌い始めたのである。勿論はじめは、課題曲だった、「花のまわりで」、「峠路」、「羊」。笑顔と歌声が時のたつのを忘れさ

格すると寮生活が始まるようだ。その寮は官殿の中にあるのだという。費用は相当かかるのではないかと考えていたが、年間100万円程度とのこと。寮費は別なのかは聞きそびれた。

変声期がくるとやむなく退会することになるようだ。彼らにとつては、変声期があるのは、残念なことだろう。寮の中では、学校の授業が行われていて、その合間に歌の練習がある様だ。親元を離れて寮生活をするのは、自立心が養われ、本人にとつても、良い経験になるといふことだろう。

この合唱団を退会すると、それまで通っていた学校に戻り、卒業後は音楽関係の仕事に就く人もいる様だが、一般の仕事に就く人の方が多いのだそうだ。

これからは少年だけでなく、少女合唱団も出て来てもいい時代がきているのではないだろうか？……。ウィーン少女合唱団……なんてネ。

費用の安さは国が全面的にバックアップしているのだろうか？ 国技のように？ これからもウィーン少年合唱団の活躍を応援していきたいと思つた。近場で来日公演があれば、是非、天使の歌声を聴き

せるような会になつたのも、夏休みを返上して夢中ですごした時間があつたからこそと思つた。今公民館の俳句サークルでは、季節の歌を投句と共にプリントして歌う習慣が生まれている。歌から美しい日本語を見つめるよろこびが会の長く続く力になっているようにも思える。

画面を通して出会つた子供達も、厳しい練習を通して育てた、歌う喜びをずっと育てていくのではないかという思いを深くしている。

天使の歌声

山田 武子

ウィーン少年合唱団が今年も来日した。

今年で来日70周年になるとTVで紹介していた。

30年位前に義姉に誘われて、横須賀芸術館に行った。

天使の歌声の少年25〜26名の彼らは皆可愛い。日本人らしき少年も1〜2名居た。

ウィーン少年合唱団に入る為には試験があり、合

に足を運びたいと思つた。

青春の一ページ

山成 健治

晩年になつた現在、自分の人生を静かに振り返ってみると、私の人生にも、少々、意外な出来事があつた。

最初は、一九五四（昭和二十九）年、会社員であつた父が、防衛庁の職員に転職したことから、父の勤務地が山口県の下関市から、遠く北海道の旭川市に移動することとなつたことである。このため、私は、下関市郊外の小学校から、北海道旭川市の小学校へ転校することとなつた。

転校した小学校では、器械体操が盛んで、やがて私も、アクロバティックな器械体操に夢中になつていった。六年生になると、私どもの器械体操のことが近所でも評判となり、地元の新聞等にも取り上げられたことから、私は生まれて初めてテレビに出る

こととなり、嬉しさと同時に、「これは一層、頑張らなければいけない」と思った。

また、大学二年の時には「学費値上げ反対」の学園紛争が起こった。

当初は、私も反対派の一人であったのだが、やがて、学費値上げ反対の運動が「産学反対」を唱える思想運動に転化していったことから、私は反対運動を降り、学生側と大学側との意見調整を図る「有志会」を組織した。

最初は小さな組織であった「有志会」も、次第に賛同者が増え、大規模な組織になっていくと、私も「有志会」の意向を大学側も無視できなくなっていくた。

「有志会」の本意は、あくまでも「一般学生」の総意を代弁するということであった。そこで私どもは、「学生投票」を行なって、学生の意見の集約に努めた。その結果、予想した通り、学生の多数意見は、「産学反対」というような思想的なものではなく、「マスプロ的な授業を極力、廃し、教師と学生との意思疎通を可能な限り密にしていこう」という、ある意味では極めて平凡な、しかし一方ではまた、「教育の

本質」に迫る革新的なものであったと言えるのかも知れない。

学生投票の実施後には、少人数による授業を始め、学生との意見交換や、学生同士による意見発表の場が拡大される等、少なくとも「一方通行」から「双方方向」による授業の場が拡大されることとなった。

藤沢にナウマンゾウがいた

横 田 佳代子

昭和55年（1980年）、藤沢の天岳院で、ナウマンゾウの化石を発掘するというので、近所の子供たちと友達と一緒に駆け付けた。ナウマンゾウが日本に生息していたのは35万年前から、15万年前である。今回発掘しているのは、約13万年前のメスの化石で、全国でも珍しいほどの良い状態の化石であった。大学の教授の笑顔と、美しい外国の若い女性の研究者が、印象に残った。一生懸命化石を掘っていた。

この時の化石は「生命の星・地球」（小田原市博物館）に展示されている。

日本と大陸は、陸続きであった。氷河時代、石器時代の日本人は、ナウマンゾウを、食料としていた。

ナウマンゾウは、石器時代の終わりに絶滅した。気候の変動と、人間による狩猟が原因と言われている。

縄文式時代になった時、温暖期になり、海面が上がり、藤沢は海の中にあった。海の中の藤沢も、すでにです。

ナウマンゾウの化石が発掘された村岡東は最近特に発展している。

村岡文化センターが令和7年10月14日に完成。

湘南ヘルスイノベーションパーク（アイパーク）が、2018年武田薬品、三菱商事等により2018年に創立された。ノーベル賞受賞者山中伸弥教授も活躍されている。横浜国立大学も加わり、世界の頭脳が、集結するような予感がする。

村岡新駅が、2030年に完成。2005年に着工。

村岡には、平良文（村岡）が城主の村岡城があった。

この平良文は藤原秀郷に協力し、平安時代中頃活躍。平良文は、大武将で、藤沢、秩父をはじめ関東一帯を収めていた。秩父神社に、社殿を寄贈している。

平良文は、藤沢の二伝寺に眠っている。春には桜が満開となり、心をなごませてくれる。

藤沢も秩父の宮とご縁がある。

秩父宮は、鶴沼別邸に住まわれていた。

亡くなられた後、スポーツの宮として、親しまれたご遺徳をしのんで、「秩父宮記念体育館」を建設した。

秩父神社のゆかりの友人より、「神社新報」が送られてきた。天皇陛下は、令和7年5月24日から25日にかけて、第75回全国植樹祭開催にあたり埼玉県に行幸をされ、秩父神社にも行幸をされた。秩父神社御鎮座2100年式年にも行幸を賜った。

新聞の中に、「関東武士団の源流、平良文を祖とする秩父平氏」と掲載されています。

ナウマンゾウの発掘された、村岡東で大きな働きをされた、平良文に感謝しました。

一話一句

吉田邦男

栗ご飯

友人から栗をいただいた。形の良いものを二〇粒ほど。家族で栗ご飯にして食べるのに丁度良い量だ。皮をむくのも苦にならない。スーパードなどで売られてゐるのは一キロ以上あり買つても持て余してしまふ。

お礼の葉書に俳句を添へてと考えをめぐらす、なかなかまとまらない。山上憶良の歌「瓜食めば子ども思ほゆ 栗食めば」を想ひだし、句に織り込まうとしたが旨くない。だめだ、諦めやう。来週お会ひするので、口頭で栗ご飯にしておいしくいただきましたと礼を述べることにした。

栗の俳句は疾うに忘れた頃、たまたまひらいた漢

体を温めたと云ふが、温かいものを口にするとはつとす。ひとはお腹が温まると元気になるものだ。そして懐が温まるとつと元気になる。

温石のごときウピスキーに憩ふ

壺中の天

NHKテレビの番組「美の壺」で進行役の草刈正雄が居る和室の掛軸に「壺中の天」とある。壺中の天とは、中国後漢の学者費長房（ひちようぼう）が、市中で壺を売る翁が売り終ると壺の中に入るのを見て、頼み込んで一緒に入れてもらった。中には立派な建物があり美酒、佳肴が並んでゐたのでともに飲んで出てきたと云ふ故事。ひとつの小天地、別世界。または、酒を飲んで俗世を忘れる楽しみを表す語句である。一壺天とも云ふ。

昼食会の幹事を引き受けた。店を電話で予約し、後日下見を兼ねて訪ねた。十人ほどだが狭くて良いから雑音が聞こえない個室をと頼んだ。同好の友と一時、小天地ならぬ狭個室で愉しく過ごせたら幸ひである。

和辞典のページに「愛」の字をみつけた。いくつかの読みがあり、そのなかにひらめくものがあつた。そして急に句が浮かんだ。栗をいただいたてからひと月半ほど経つてゐた。

栗ご飯 憶良の歌を愛でながら

温石

「あ、血管が切れて出血したー」「先生バイタルが下がりがり続けてゐます」「先生どうしますか?」「もうだめだ、兎に角出血を止める、もうインオベにする」。すると、軽快なメロディーとともにドクター大門未知子登場「わたし失敗しないので」すぐに適切な処置をして手術成功。よかつたー!

昨夜からの雨は午後になつてもやむ気配がない。この雨が冬を連れてくるのだらう。録画したドラマに飽きたので紅茶でも飲むことにする。熱い紅茶にウピスキーを一滴。いい香りなのでもう少し。しまつたー少しのつもりが入れすぎたやうだ。これではウピスキーの紅茶割りだ。ホッコリ!お陰で温まってきた。むかし、禅僧が焼いた軽石を布に包んで身

花冷えに壺中の天のご憩ふ

落花

桜が散り始めた。今年は四月初めに開花を迎へて桜花の下の入学式となつたやうだ。桜が散る様子を云ふ語に花吹雪があるが、近ごろ「花くたし」や「花散らし」と云ふ語を耳にする。花くたしは、「卯の花腐し」が正しく、陰曆四月から五月に降る雨、梅雨に先立つて降る長雨、五月雨のこと、また、花散らしは九州北部地方で三月三日を花見とし、翌日若い男女が集会して飲食することださうだ。しかし、言葉は時とともに変化する。咲いた花に降る雨を「花くたしの雨」「花散らしの雨」と誰もが云ふやうになる日は遠くないと思ふ。

「だるまさんがー」誰もうごかず花吹雪